

「モーセは、ベツアルエルとオホリアブ、および主から心に知恵を授けられた、心に知恵のあるすべての者、すなわち心動かされたすべての者にこの仕事に従事させるために呼び集めた」(出エジプト記36章2節)。

新型コロナウイルス感染防止のために、「リモートワーク」「オンライン帰省」という言葉が頻繁に使われるようになり、今まで以上にインターネットを用いた交流が活発になったように思います。私たちの交わりを通して感染する目に見えないウイルスのおかげで、インターネットの SNS (ソーシャルネットワークサービス) を利用した新しい可能性が見えてきた部分もあります。多くの教会でも、動画配信サービスやネットミーティング機能を用いた礼拝や祈祷会をしています。

これまでの教会のあり方やわたしたちの当たり前の生活が、目に見えないウイルスで崩れてしまいました。これを機にこれまでの生活の在り方、教会のあり方を今一度考える時を神さまが備えて下さったのかもしれないと思うと、私たちは今、どのように神さまから語り掛けられているのだろうか、示されているのだろうかといながら、新しい可能性へと目を向けるチャンスでもあるのかなあと思われています。

インターネットや SNS を使う新たな可能性が開かれる中、SNS を用いて人の心を壊した事件もありました。心が壊れるだけでなく、その人の一生も壊れてしまった出来事は、今回が初めてではありません。SNS という私たちの生活を本来は豊かにしてくれるはずの道具を使って、使い方ひとつで、自分の気に食わない人を排除し、自分の手を汚さずに人の命を簡単に奪うことができるという力があることも同時に示されています。

ネット上で普段出会えない人と出会うことができ、簡単な操作で多くの人に励ましや連帯のメッセージを送ることができるし、同時に人の命を簡単に奪うことができる時代。そのような社会の中に生きる私たちは、どのような交わりを築くことができるのでしょうか。聖書の中にインターネットや SNS を正しく使うためのマニュアルがあればいいのですが、聖書の時代にはもちろん、そのような技術はありませんから、神さまからの明確なルールはありません。だからといってインターネットやメール、SNS で何をしてもよいのではなく、「心に神さまの知恵を与えられた者」

として、わたしたちは聖書から聞いていくほかありません。神さまの知恵をいただきながら、インターネットや SNS などの便利なツールを使うことが求められているのだらうと思います。

インターネットの普及でネットを介する人との交わり、情報があふれるほど豊かになると同時に、人の痛みに鈍感になっていく貧しさが今のわたしたちの世界には存在するのだらうと思わされています。

旧約聖書には、幕屋建設は、「心に知恵」を授けられた人たちすべての人が、その働きに携わったと書かれています。「心に知恵」という前に、心は、いったいどこにあるのか、心臓か、脳かは言及されていません。ここで出てくる「心」のヘブライ語の言葉には、心、想い、意志、内なる人格という意味があるそうです。神さまの知恵とは、エジプトを脱出してきたイスラエルの人たちにとっては、まさに命の言葉、生きるために必要な言葉だったのだらうと思います。神さまに生きるようにと励まされ続けた人たちが、神さまからいただいた言葉。その言葉を受けて、奴隷で人格を奪われていたイスラエルの人たちが、人格を取り戻していき、神さまからもらったそれぞれの命を大切に、生きてきた物語がここに記されているのだらうと思います。つまり、神さまからの知恵を授けられた人たちが、神さまの働き、そして礼拝、共同体形成に招かれているというのです。

神さまが心に知恵をくださるということは、わたしたちの内側に、神さまの息吹を吹き入れてくださるということのだらうと思います。そしてその息吹は、日々新たにされているのだと、聖書はわたしたちに語り掛けてくれています。

コリント信徒への手紙二 4 章 16 節

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。

心に知恵を授けられている者として先の見えない未来に、命の神さまが、私たちに何を語っておられるのか、私たちの心に生きるための力と知恵を備えて下さっていることを覚え、正しく歩みたいと願っています。

これから来るであろうポストコロナの時代に、わたしたち大井教会は誰に、何を語ることができるのでしょうか。今までの「あたり前」が崩された今だからこそ、これから何ができるのか、共に考える豊かな時を主が下さることを願っています。